

第 38 回国際養蜂会議 参加報告

酒井 哲夫・榎本ひとみ

旧ユーゴスラビア連邦から 1999 年に独立したスロベニア共和国は、四国と同じくらいの面積に人口は約 200 万人、自然豊かで、歴史も香る中欧の小国である。第 38 回国際養蜂会議 Apimondia2003 は、この国の首都リュブリャナ（図 1）で開催された。カーニオラン種のふるさとであり、偉大な養蜂指導者アントン・ヤンシャ誕生の国でもあるので、ミツバチとは因縁浅からずというところである。

玉川大学グループは、松香光夫教授を団長に、小田原の養蜂家高橋匡さん、昨年 1 月の研究会初参加以来お近づきになった高円寺の郵便局長大澤政雄さん（兼業養蜂家）、アジア養蜂研究協会の榎本、その友人でミツバチ大好きな駒場敬子さんと酒井の 6 名。会議は 8 月 24 日夜の開会式から始まっていたが、日程の関係で私たちは 26 日に日本を発ち、会議 3 日目の 8 月 27 日からの参加となった。

日本からはアピモンディア役員を務められた渡辺英男さんご夫妻、高橋國人さん率いる兵庫県養蜂振興会の一行 10 人、山田養蜂場関係者、その他の参加者もあり、総勢 30 人余であった。

猛暑の中欧

機窓から眺めた畑が茶色いので不思議に思ったが、着陸してみればこの夏ヨーロッパを襲った猛暑の影響だった。訪問した中欧 3 か国ともトウモロコシが立ち枯れ、壊滅的な被害を受けていた。乗継ぎで短時間立ち寄ったウィーンは、すでに太陽はだいぶ傾いているにもかかわらず、まだまだ厳しい暑さ。まぶしい日差しに顔をしかめ、汗を拭きながらシェーンブルン宮殿の庭園などを急ぎ足で回った。空港に戻り、



図 1 リュブリャナの城山から見た町の中心部

兵庫県の皆さんとも一緒に中型機に乗り換えて、いよいよリュブリャナに向かう。

迷路のような会場で

私たちのホテルから会場まではオペラ座や博物館を見ながら一直線に徒歩で 10 分。やはり暑い。町は健全だがレトロできまじめな田舎の小都市という雰囲気である。27 日の朝、会場入り口で最初にお世話になったのは旧知のクロアチア・ザグレブ大学ジュロ・スリマノビッチ教授ご夫妻（後述）だった。恵美夫人はプロの通訳としてご活躍だが、今回の訪問では私たちのためにボランティアでいろいろ助けて下さった。受付で待つ間にも、ケニガー教授（ドイツ）、ボイケ博士（ポーランド）、ボーネック氏（フランス・前アピモンディア会長）など懐かしい方々にお会いし、挨拶を交わすことができた。

「そうなんだ。ここはヨーロッパなのだ。」と納得しつつ、論文要旨が英独仏スペインの 4 か国語で列記された分厚いプログラム冊子を開き、分科会の発表予定を調べる。今回私は理事を務める日本養蜂はちみつ協会から、各国の蜂病対策について調査するために派遣された。関連がありそうな「ミツバチの病気と治療」、「ミツバチの生物学」、「アピセラピー」各分科会の講演を聞くことにする。

世界中から 2,500 人を越える参加者が集まった会場は共和国広場に面し、ユーゴ時代に建設された立派だが不思議な構成の建物である。正面出入口のあるアピエクスが第一会場大テントを奥に進み、右に曲がると大小のホールが地上階から地下 3 階まで分散する複雑な構造の会

場につながっている。地上階は大にぎわいのアピエクスポ第二会場で、その隅にある目立たない狭い階段を発見して地下1階におり、更なる展示ブース群を突き抜けると、シンポジウムが行われる中ホール入口にたどりつく。ホール内でさらに地下深く階段を下りて発表会場に入る。別の小ホールに行くにはいったん上に戻って、また別の階段を地下2階、3階に下るなど、移動は大変だった。

印象に残った講演は、リッター博士が座長をつとめる蜂病分科会(図2)でのドイツ、ノイマン教授の「ハチノスムクゲケシキスイ」に関する発表と、多数みられた「化学薬品を使わないバロア病、アメリカ腐蛆病(afb)の予防、治療」についての研究である。ミツバチ生産物への農薬や抗生物質の残留問題を討議する特別集会も開かれ、有機養蜂、有機ハチミツへの指向は世界的に叫ばれているトレンドだと痛感した。アピセラピー分科会は、日本から岐阜大学の恵良教授がプロボリスの抗酸化作用に関する講演を行い、好評であった。ここでは他に「カスピ海液」というローヤルゼリー、フェロモン、その他の天然物の混合液でafbを魔法のように治すという発表があり、会場からも質問があったが、その正体を知りたいものだと思う。

他にミツバチ以外のポリネーターの重要性を謳った集会、環境指標としてのミツバチ利用のセミナーもあった。甘露蜜について、蜂病に耐性を持つミツバチの育種についてなど、この地域らしいセッションもあったが、27日より前の開催で聞き逃した。

講演の合間を縫ってアピエクスポ会場を見る

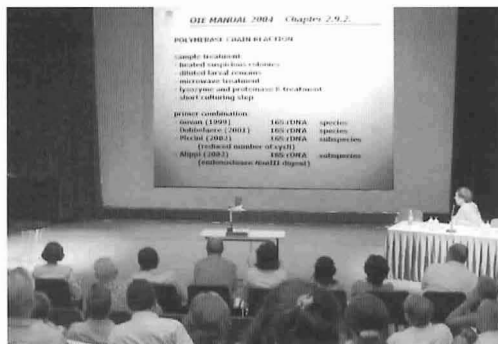


図2 蜂病分科会シンポジウム

のだが、複雑な会場に、地元スロベニアの多数の養蜂組合、企業をはじめ、ヨーロッパ、アジア、アフリカ、南北アメリカのブースが所狭しとばかり並び、ものすごい人出である。蜂具、ハチミツ、ミード、プロボリス、蜂ろう製品、図書等々を見て回った。分科会発表がすべて地下なためか、IBRA など学術的なブースは地下2階にあって、1日目はとうとう見つけられなかった。

総会・閉会式

28日午後6時から、立派なパイプオルガンのある大ホールで盛大に開催された(図3)。スロベニア養蜂協会は130年前に設立され、傘下には200組合があるという。上質な吹奏楽の演奏と共に200の組合旗が壇上に並べられた。小国スロベニアで、大きなイベントが成し遂げられた、その心意気に敬意を表したい。

アピモンディア活動報告、数多い表彰等は恒例だが時間が長く、いささか疲れる。コンテストの結果を表1に示した。IBRAは雑誌と書籍で2つのメダルを獲得している。あざやかな緑色のポロシャツできめた次回開催国アイルランド代表団の、2005年にダブリンで会しましょう(<http://www.apimondia2005.com>)というあいさつとプロの舞踊団による有名なリバーダンスがあり、雰囲気盛り上げたところで、いよいよ次々回(2007)開催地決定の投票となる。オーストラリアとアルゼンチンの立候補演説の後、アピモンディア正式参加国団体の代表による電子投票が静かに進み、やがて壇上のスクリーンに28対19でオーストラリアの勝利を示す大きな円グラフが現れた。開催地はメルボル



図3 閉会式壇上に整列したスロベニア養蜂組合旗



図4 ミツバチ生産物展を市内の公園で同時開催

ン、日程は未定である。フェアウェルパーティーが予算・日程の関係からか今回は大規模には開かれず、世界の蜂友と旧交を暖める機会がなかったのは少し残念だった。

直接的なミツバチ生産物以外の、花粉媒介を含むミツバチによる環境への経済的貢献度については、すでに米国などでかなり大きな数字が試算されているが、日本でも大いにアピールしたいとの気運がある。オランダのソメイヤ教授にご協力をお願いしたいと渡辺英男さんに橋渡しをお願いしておいた。閉会式終了後その機会に恵まれたことは幸運であった。

エクスカージョン

見学旅行は閉会式翌日(8月29日)にあった。国のほぼ中央にあるリュブリャナから東西南北に向かう多彩な12コースから選ぶ。高橋、大澤、駒場の3名は渡辺夫妻と共にワイナリー見学を含む東のハンガリー国境方面への12時間コースへ、残りの3名は、アルプスに連なるスロベニア最高峰トリグラフ山の麓、カーニオランの故郷だという北西方向へ行き、養蜂博物館と代表的観光地ブレド湖を観光する予定の9時間のコースを選んだ。

表1 アピモンディア 2003 コンテスト入賞者(抜粋)

新技術	THOMAS (仏), SWIENTY AIS (デンマーク)
新生産物	WANG'S (中国), KRISCHER (独)
販売促進包装	KRISCHER (独), Kozinc (スロベニア)
一般書籍	Henri (仏), Ruottinen (フィンランド)
専門書籍	IBRA (英), Bolger (NZ)
養蜂雑誌	IBRA (英), BAUERENVERLAG (独)
コレクション	TENTORIUM (露), Meier (スイス)
ウェブサイト	BOZNAR (スロベニア)

アピモンディア公式サイト <http://www.apimondia.org> 参照



図5 トリグラフ山国立公園保護センター周辺

集合場所で各国語を操る私たちのコースのガイドさんを見つけて一安心、バスはアカマツによく似た松林やヒマラヤスギの多い山を抜け、起伏はあるが畑の続く自然豊かな田舎をみながら幹線道路をひた走る。集落ごとに尖塔のある立派な教会がある。トウモロコシ畑は先述の通り壊滅状態だった。ソバ畑もあり懐かしい。

小雨けぶる中、すでにオーストリア・イタリア国境に近い山間の鉄の町イエセニツェへ到着。打って変わった涼しさに驚かされる。鉄鉱山としてローマ時代からの歴史を持つが、すでにその勤めを終えた町は、古い製鉄工場の一部を鉄の博物館として残し、観光都市へ変身中である。博物館内で出迎えの養蜂組合の方々から、誇り高いこの地域の養蜂史と現状の説明を受けたあと展示物を見学。再現された旧式の台所、古い什器などに欧米人が強い興味を示していた。

雨が時々激しく降る中、組合員の先導で山間地に入り、ヨーロッパ伝統の蜂舎 (bee house) を守る養蜂家訪問へ。一つの蜂舎にきれいに彩色された巣箱がぎっしり並び、上下10群ずつ計20群のカーニオランが、元気に働いている。この蜂舎は放牧地の中にあり、周りに見事なマロニエ (トチノキ) の大木が数本、たわわに実をつけていた。谷降ろしの冷風が急に激しく吹いてくる中、ハチミツ入りウオッカにカナッペ、ケーキの接待を受ける(図6)。鉄の町でも、次の養蜂場でも同様に歓待してくれた。

バスに揺られて一眠りしていたら、両側が絶壁の溪谷に沿う山道を走っている。すでにチロルに続くアルプスの山中だった。その作品がスロベニア国歌の歌詞になっている国民的詩人フ



図6 地元養蜂組合の長老夫妻（中央）と

ランツ・プレシェレーン博士(1800-49)の生家を中心に、失われつつある伝統的農耕文化を動態保存し、エコロジカルな村落開発に結びつけた先進的な取り組みをする、トリグラフ山国立公園保護センターに立ち寄る。欧州各国元首も訪問する有名な場所らしい。「民謡保存会」の老若男女10人ばかり、民族衣装に身を包み楽器に合わせて、素朴で賑やかな歌と踊りを披露してくれた。ミードとハーブティーをいただき施設見学。すでに午後2時を過ぎ、寒さが身にしみるようだが、ガイドに先を急ぐ様子もなく、レストランへ向かう気配は一向にない。

渓谷から漸く山里に出て次は、カーニオランのブリーダー（育種家）を訪ねる。立派な住宅の周りに、リンゴ、プラムなど多彩な果樹を植え、その下に浅い巣箱（shallow super の大きさ）に貯蜜用の浅い継ぎ箱を数段重ねて、60群ほどの蜂群を飼育している。正規の巣箱や継ぎ箱だと重くて、取り扱いが大変だからとのことだったが、大量の材木を蜂場に積み上げ、巣箱製作の立派な工房も持つアクティブな人のようだ。小さなケーキやクッキー、カナッペなどをおいしくいただきつつ、昼食はどうなったのかと案じる。しかし巣箱を開け、中の様子をオープンに見せてくれるブリーダーを囲めば、そこはアピモンディアの参加者である、興味は尽きない。養蜂用語の通訳に苦しむガイドさんを助けながら、みんな熱心に質問を続けた（図7）。

ちなみに、採れるハチミツは森の蜜（甘露蜜）と花の蜜が半々位、女王蜂は1頭9000トラル（約5000円）、パッケージビー12000トラル、蜂群1群18000トラルだそうだ。



図7 カーニオランのブリーダー（中央）を囲む見学者

なんと昼食はすぐ近くのレストランとのこと、勇んで歩いていく。地方色豊かな店内に座り、著名な婦人演奏家が奏でるチターの音色を聴き、養蜂組合の長老ご夫妻と少しずつ話しながらさらに待つ。ついにヌードル入りスープに続いて名物料理が現れたのは午後5時前だった。どっさりと皿に盛られて、どれもおいしいのだが食べきれない量である。おみやげに養蜂組合お手製のミード入り小瓶をいただいて6時近くに出発。ゆっくり観光するはずの景勝地ブレド湖はすでに夕闇の中、雨足はさらに強い。湖のほとりで一瞬車を止め、中之島のお城を一目見ただけで、帰りを急いだ。3時半帰着予定が実際にはホテルに戻るともう8時30分だった。松香先生も酒井も、カバーのかかったベッドへそのまま倒れ込んでぐっすり。目が覚めてみると午後11時、急いで電話をするが、私たちよりもっと時間がかかるツアーにのった人たちはまだ戻っていないとのこと。「たくさんのワインとともに、今やっと帰りました」と連絡が入ったのは11時30分を回った頃だった。

会議後のミツバチ行脚

ザグレブ大学（クロアチア）

8月30日、昨日の疲れも一夜で吹き飛ばし、朝9時渡辺ご夫妻に見送られ、バスでリュブリャナから南隣の国、クロアチアに向かう。EU加盟をひかえ高速道路整備が大急ぎで進んでいる。反対車線はアドリア海沿岸からパカンスを終えて北上する各国の車で大混雑。国境付近では日本のお盆のような何kmも続く大渋滞になっていた。2時間程でクロアチアの首都

ザグレブに到着，中世から交易中継地として栄えた大都会である．立派な教会があり，ザグレブ大学は300年の歴史を誇る．独立時には市街地で戦闘もあったそうだが，市電が忙しく行き交う町には洗練された活気がある一方，スリなどの危険もある．土曜なので午前中だけ営業という銀行に駆けつけてまず両替，昼食もすませて出迎えの恵美夫人と再会する．マイクロバスに乗り換え，ザグレブ大学獣医学部に向かう．

スリマノビッチ教授の古い学生だという副学部長の出迎えを受け恐縮した．教授は1974-76年の若き日に東京大学に留学，その間に養蜂家と交流，すっかり日本最真になられ，1985年名古屋でのアピモンディア開催にもご尽力くださった．私たちも親しく交際を続けている．教授はバロア病に関する先駆的研究で博士号を授与された蜂病の権威で，現在も養蜂・蜂病を担当されている．1991年に現クロアチアのスプリットで第33回アピモンディア開催が予定され，教授はその中心で活躍しておられたが，ユーゴスラビアの内戦勃発により，やむなく中止となった経緯がある．教授室で当時準備されたポスターを拝見し（図8），今回の大会にどんな感慨をお持ちだろうかと思った．

教授の足跡とクロアチアの養蜂事情を，恵美さんがパワーポイントにまとめ，解説してくださった．ユーゴ時代に出版された多くの養蜂雑誌，書籍や研究が，独立後は継続できない難しさがあるようだ．ミツバチ研究の関連

施設も見学した．蜂舎の周りには，日本からもらったというビービーツリーが大きく成長していた．

次にクロアチア第一の養蜂企業であるPIP社を訪問した（図9）．高級住宅地にある自宅兼加工工場を見学し，社長室で質疑応答の時間を持った．幸いスリマノビッチ教授も同席され，恵美さんに通訳をお願いできたので，大変順調に討論ができて，両国の蜂病対策など有意義な情報交換の場となった．PIP社はボスニア・ヘルツェゴビナにも工場を持ち，販売しているが今は困難が多いという．かの地にミツバチの楽しげな羽音がひびく日が早いことを願った．ザグレブからサバ川を渡って車で南に約1時間，トプスコにある蜂場にも案内していただいた．丘陵地を背に，足下に谷川が流れ，多様な広葉樹が茂り，目前には緑豊かな大平原が広がる豊かな環境である．ここでカーニオランが通年飼育されている．巣箱は正規の大きさで，巣箱同士隙間なく並べられ，100群近くあった．

ヘルベルシュタイン城・エルサッサー養蜂場 （オーストリア・グラーツ）

オーストリア帝国時代に敷設された鉄道は現在も2本の国境を越えてザグレブとグラーツを4時間で結んでいる．午前中に市内観光を楽しんだ後，突然の豪雨の中ザグレブ駅を出発．スロベニアを経てオーストリアに入り，グラーツに近づく頃に雨はあがり，夕日が差していた．

一昨年「ミツバチ科学」を定期購読したいとのヘルマン・エルサッサー氏の電子メールが，グラーツから玉川大学に届き，それが優しい言

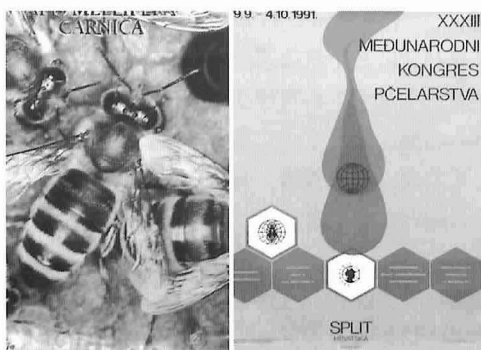


図8 新旧アピモンディアのポスター
第38回（左）と幻の第33回（1991）



図9 PIP社のミツバチを讃えるモニュメントを
囲む．手前右がスリマノビッチ教授



図10 ヘルベルシュタイン城（上）と城内最深部の地下牢（下）。左端が幸子夫人。

葉遣いの日本語だった。エルサッサー夫人幸子さんと榎本とのお付き合いがそれから始まり、この度の訪問となった。

9月1日午前8時、夫妻のご案内でグラーツ市内から東北へ40 km、ヘルベルシュタイン城動物自然公園へ向かう。立派な家や教会がある豊かな村落地域を通る。車窓から見る畑はリンゴ、ブドウそれにトウモロコシだが、ここでもトウモロコシはさんざんな状況だった。

責任者から歓迎の挨拶を受け、まず動物自然公園を見学する。エリマキキツネザルを始め5大陸の130種の動物を飼育、自然や貴重な動物を保護する欧州と世界の動物園・水族館協会(EAZA, WAZA)に所属し、大学の協力を得て生物・環境教育、種の保存等の活動もしているとのこと。45 haの敷地には森林、ワイナリー、果樹園、有機農法耕地などが広がっている。

ヘルベルシュタイン城は13世紀中期以来400年間に増築を重ね、ゴシック、バロック、ルネッサンスの3建築様式が完全に混合している興味深い建築物である(図10)。初代城主から同じ一族が所有、現在はヘルベルシュタイン伯爵家の20代目、21代目の住居になっている。



図11 トリオ巣箱を使った有機養蜂におけるバロア病対策を説明するエルサッサー氏(右から2人目)

蛇行する溪谷の絶壁上に立つ美しい城の一部は公開されていて、私たちが昔風の制服を着た若くて可愛いガイドに説明を受け、幸子さんの通訳で見学することができた。

エルサッサー氏は12年前に自然保護研究所(主に昆虫学を専門)から養蜂家として独立、約100群を常に有機農業地帯に置くことを心がけ、有機ハチミツ生産に努めている。依頼を受けて教育的蜂場を維持しているヘルベルシュタイン動物自然公園も、全域が農薬禁止地帯である。ここを含め数か所の蜂場で森の蜜(甘露蜜)、花の蜜(百花蜜)、アカシア蜜、クリ蜜、マロニエ蜜などを採蜜、プロポリス製品や花粉も販売している(<http://www.imkereie-elsasser-austria.at>)。蜂ろうは腐蛆病予防のため自家製の巣礎に使用し、余分が出たときはお嬢さんがろうそくや石けんを作るとのことであった。

巣門が三分割された見慣れない巣箱がある。3匹の女王蜂が1巣箱で働くトリオ巣箱で自然農法のバロア対策として、研究中とのこと(図11)。一般に奨励されている蟻酸は養蜂家にもミツバチにも不快な悪臭がある。乳酸による洗浄と、トリオ巣箱管理法の改良で、よりよい養蜂への道を開発すべく努力中だと熱心に説明してくれた。有機養蜂、有機ハチミツを真剣に考え、実行しているエルサッサーさんに敬意を表したい。

(酒井：〒798-1314 北宇和郡広見町久保34、榎本：〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1 玉川大学ミツバチ科学研究施設内アジア養蜂研究協会)

写真：松香光夫、高橋匡、榎本ひとみ